

Ⅲ. 特殊学級に関する結果及び考察

1. 基本情報

(1) 学校全体に関する内容

①回収率

小学校の特殊学級からは合計 242 の回答が得られた。また、中学校の特殊学級からは合計 200 の回答が得られた。それぞれの学級種ごとの発送数、回答数と回収率は、小学校を表Ⅲ－1 に、中学校を表Ⅲ－2 に示した。

表Ⅲ－1 小学校特殊学級の回収状況

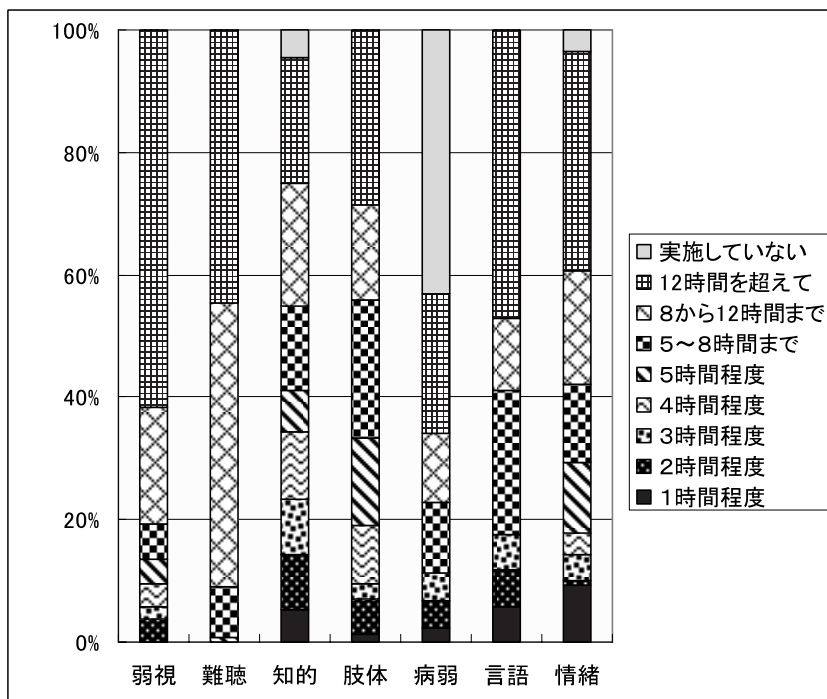
	発送数	回収数	回収率
知的障害	56	51	91.1%
肢体不自由	43	37	86.0%
病弱・身体虚弱	39	30	76.9%
弱視	35	32	91.4%
難聴	40	35	87.5%
言語障害	13	11	84.6%
情緒障害	54	46	85.2%

表Ⅲ－2 中学校特殊学級の回収状況

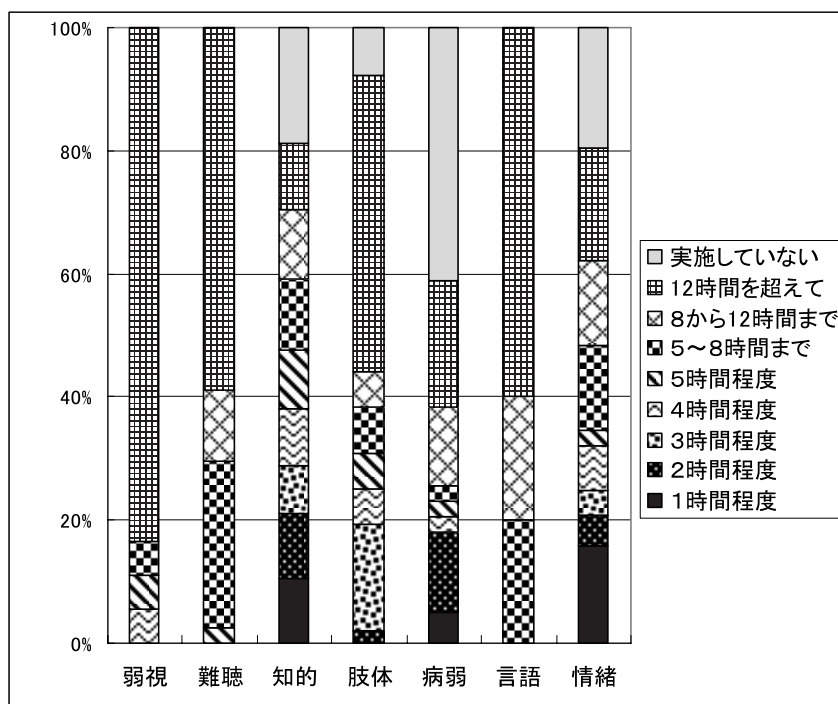
	発送数	回収数	回収率
知的障害	55	48	87.3%
肢体不自由	35	29	82.9%
病弱・身体虚弱	32	29	90.6%
弱視	15	14	93.3%
難聴	35	29	82.9%
言語障害	4	4	100.0%
情緒障害	54	47	87.0%

②交流及び共同学習の実施状況

平成 17 年度における 1 週間あたりの交流及び共同学習の実施時間について、該当する児童・生徒数の記入を求めた。その結果を学校種毎に合計し、割合を示したものが、図Ⅲ－1（小学校）と図Ⅲ－2（中学校）である。



図Ⅲ－1 小学校特殊学級における交流及び共同学習の実施状況



図Ⅲ-2 中学校特殊学級における交流及び共同学習の実施状況

弱視、難聴、言語障害では、小学校、中学校とも全ての児童生徒が交流及び共同学習を実施していた。小学校の肢体不自由でも全ての児童が実施していた。また、弱視、難聴、言語障害、肢体不自由では、小学校、中学校とも「12時間を超えて」実施している児童生徒の割合が大きかった。

知的障害と情緒障害では、小学校、中学校とも回答が分散した。児童生徒の実態によって様々な実施状況があると考えられる。

病弱・身体虚弱では、小学校、中学校とも実施している児童生徒の割合は6割で、7障害種中もっとも少なかった。一方、実施している児童生徒の内訳を見ると、「12時間を超えて」実施している児童生徒が多かった。実施しない児童生徒が多い反面、長時間実施できる児童生徒も多いことがわかった。

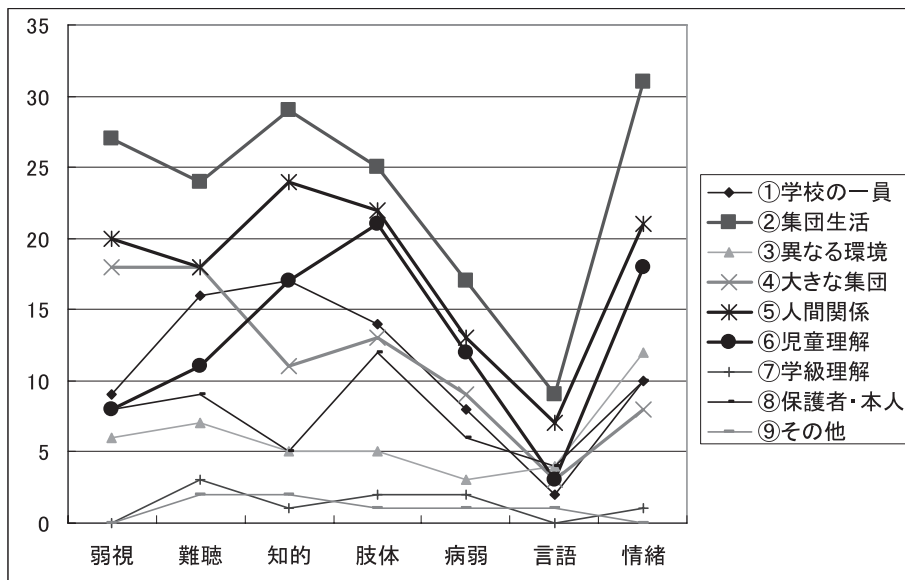
(2) 交流及び共同学習の実施について

①目的・ねらい

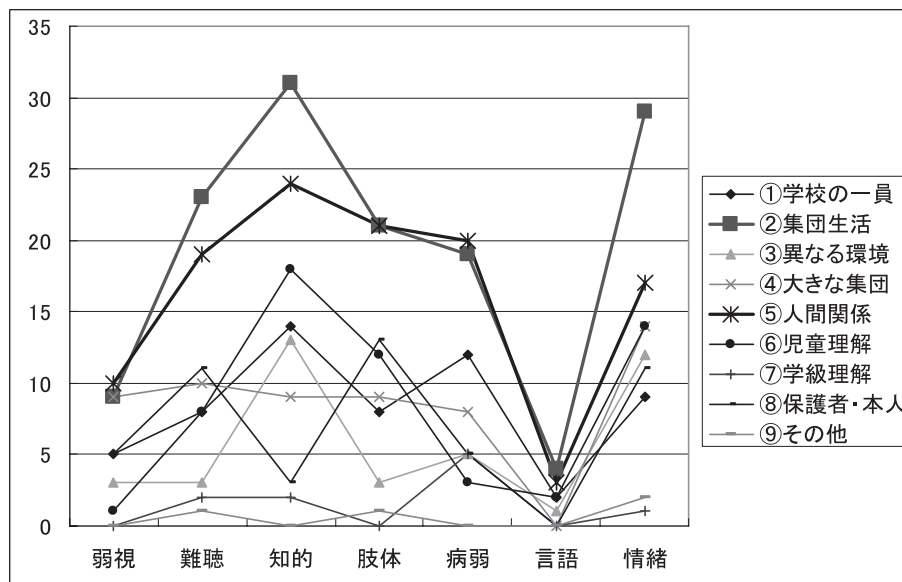
交流及び共同学習の目的・ねらいについて、その他を含む9の選択肢から3つ選択回答を求めた。図Ⅲ-3に小学校について、図Ⅲ-4に中学校について、学校種毎の回答数を示した。

小学校では、全体として「②集団生活で社会性を培う」「⑤校内でのつながりや人間関係を形成する」が多かった。これらに続いて、弱視や難聴では「④より大きな集団で学習を経験し、学ぶ力を培う」が多かった、知的障害、肢体不自由、病弱・身体虚弱、情緒障害では「⑥特殊学級の児童生徒について理解してもらう」の方が多かった。

中学校では、全体として「②集団生活で社会性を培う」「⑤校内でのつながりや人間関係を形成する」の2選択肢の回答が多い傾向であった。



図Ⅲ—3 小学校特殊学級における交流及び共同学習の目的



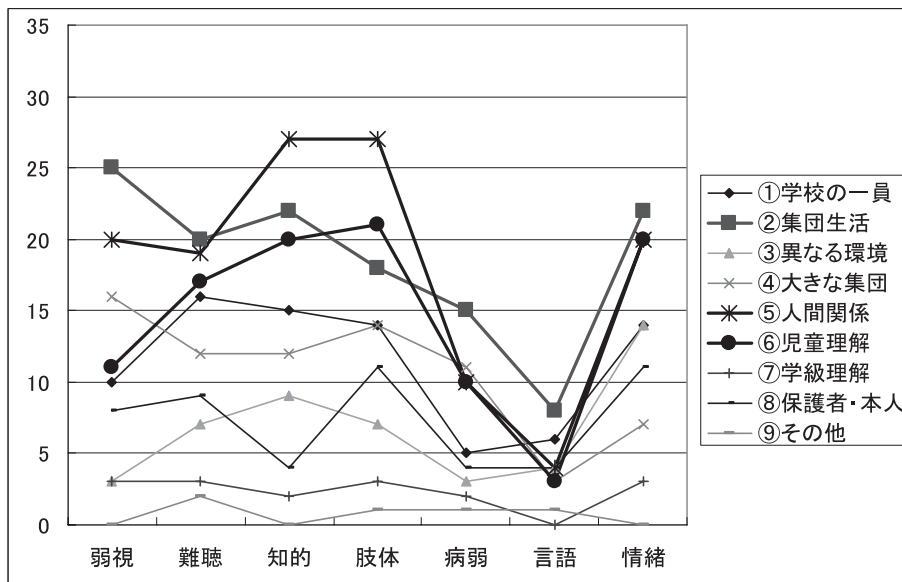
図Ⅲ—4 中学校特殊学級における交流及び共同学習の目的

②成果

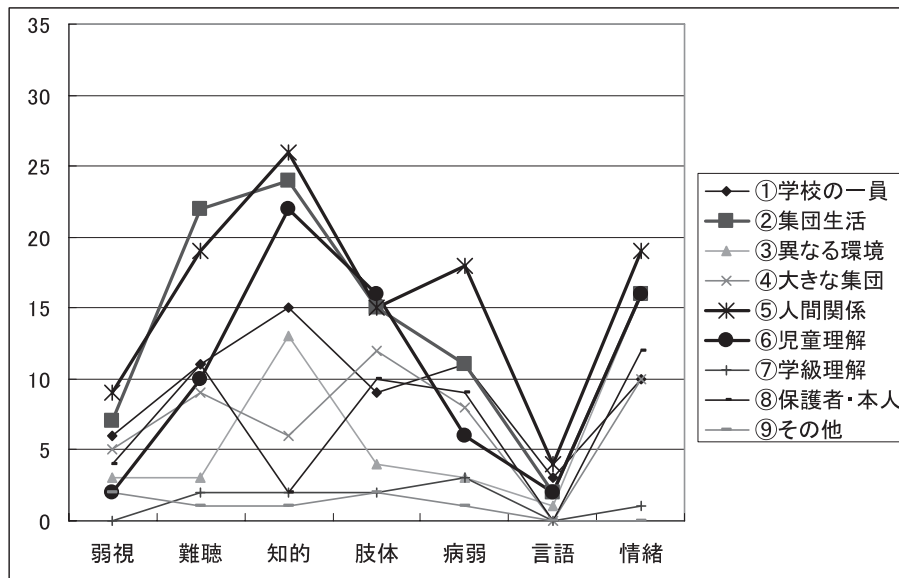
交流及び共同学習の成果について、その他を含む9の選択肢から3つ選択回答を求めた。図Ⅲ—5に小学校について、図Ⅲ—6に中学校について、学校種毎の回答数を示した。

小学校では、全体として「②集団生活で社会性を培うことができた」「⑤校内でのつながりや人間関係を形成することができた」が多く、目的・ねらいの傾向と類似しているが、知的障害と肢体不自由では順位が入れ替わり「⑤校内でのつながりや人間関係を形成することができた」の方が「②集団生活で社会性を培うことができた」よりも回答が多かった。これらに続いて、弱視や病弱・身体虚弱では「④より大きな集団で学習を経験し、学ぶ力を培うことができた」が多かった、難聴、知的障害、情緒障害では「⑥特殊学級の児童生徒について理解してもらおう」の方が多かった。

中学校では、全体として「②集団生活で社会性を培うことができた」「⑤校内でのつながりや人間関係を形成することができた」「⑥特殊学級の児童生徒について理解してもらおう」の3選択肢の回答が多い傾向であった。



図Ⅲ—5 小学校特殊学級における交流及び共同学習の成果

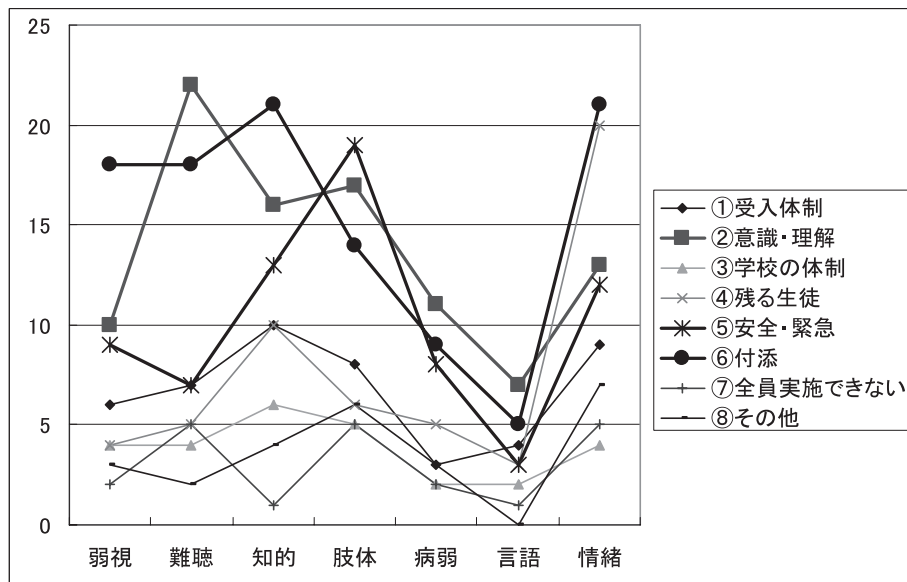


図Ⅲ—6 中学校特殊学級における交流及び共同学習の成果

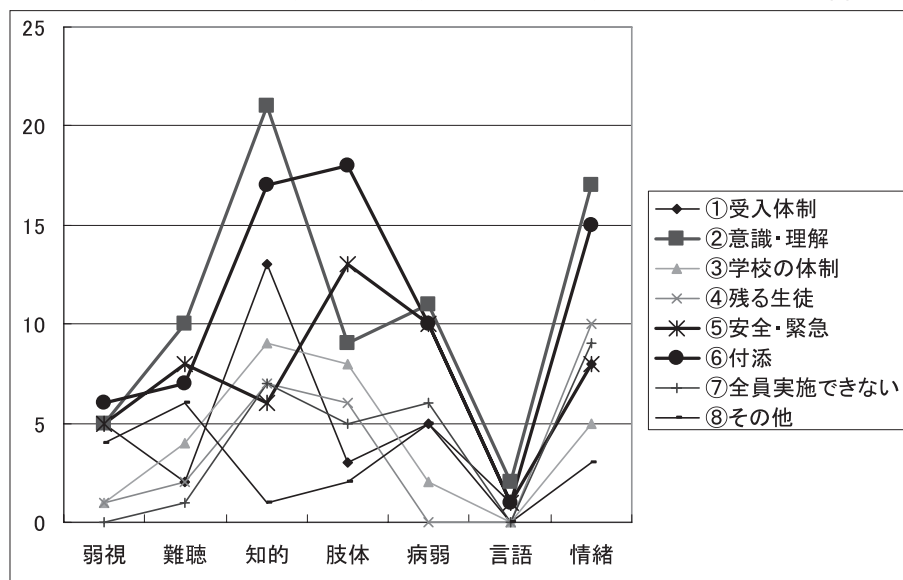
③課 題

交流及び共同学習の課題について、その他を含む8の選択肢からあてはまるもの全てを選択して回答するよう求めた。図Ⅲ—7に小学校について、図Ⅲ—8に中学校について、学校種毎の回答数を示した。

小学校では、全体として「⑥特殊学級担任の付き添いの問題」「②交流先の学級の担任や児童生徒の意識や理解について」「⑤安全確保・緊急対応の問題」の3選択肢の回答が多かった。このうち「⑥特殊学級担任の付き添いの問題」が多かったのは、弱視、知的障害、情緒障害であった。「②交流先の学級の担任や児童生徒の意識や理解について」が多かったのは難聴、病弱・身体虚弱、言語障害であった。「⑤安全確保・緊急対応の問題」が多かったのは肢体不自由であった。これら以外では情緒障害で「④交流時、特殊学級に残る児童生徒の対応について」が際だって多かった。



図Ⅲ—7 小学校特殊学級における交流及び共同学習の課題



図Ⅲ—8 中学校特殊学級における交流及び共同学習の課題

中学校でも、全体として「②交流先の学級の担任や児童生徒の意識や理解について」「⑥特殊学級担任の付き添いの問題」「⑤安全確保・緊急対応の問題」の3選択肢の回答が多かったが、「②交流先の学級の担任や児童生徒の意識や理解について」が多かったのが、難聴、知的障害、病弱・身体虚弱、言語障害と情緒障害で、「⑥特殊学級担任の付き添いの問題」が多かったのは、弱視と肢体不自由であった。

(久保山茂樹)